

北海道・東北史研究会編

『海峽をつなぐ日本史』

中野渡 一 耕

I

近年、北方史の研究の進展ぶりは著しいものがある。その中で研究の核として寄与してきたのは北海道・東北史研究会の力である。同会は一九八六年の函館シンポジウム以来一貫して「中央からの視点では見えて来ない地域史像を構築」することを目的に、研究の旗を振ってきた。そのシンポジウムの成果は『北からの日本史』と題し、既に二巻が発行されている。昨年、再び本シリーズの第三弾に当たる本が刊行された。それが本書『海峽をつなぐ日本史』である。

本シリーズはシンポジウムの開催に合わせて刊行されてきた。すなわち、一巻は前述の函館大会、二巻は一九八八年の弘前大会の成果である。本書も同様に一九九〇年に北海道上ノ国町で行われた「上ノ国シンポジウム」の講演および研究発表を中心にとめたものである。

基本的スタイルも踏襲されているが、シンポジウムの内容同様深化がみられる。例えば、後述するが歴史考古の成果が取り入れられたことや、前巻までと様相を異にするのはタイトルが「海峽をつなぐ日本史」に改められたことである。このことは単に中央の視点に対する地方からの視点の主張といった段階から一歩進んで、人的・物的交流などを通じた、北海道、東北という同じ北方地域としての均質性、独自性を解明し、一

つの自立した地域としての「北」の姿を改めて構築しようとする姿勢の現れであると言えようか。ただし、その一方で一巻、二巻に特徴的だった「アイヌ史」の位置づけの論稿はひとまず当初の目的を果たしたのか、本書ではあまり見られない。以下、僭越ながら順に本書の内容を紹介して行くことにしよう。

## II

本書も前回同様三部構成をとり、一部はシンポジウムにおける講演、二部は同じく研究報告、三部はシンポジウムを踏まえた書き下ろしという体裁を取っている。

第一部「日本海の海上交通と海の領主」は網野善彦氏の講演をまとめたもの。網野氏は近年の日本海海上交通の研究を踏まえ、「海」のもたらず人々の交易や交通の広がりや、支配者側の海上交易の支配の重要性を示し、国家論的なものでなく、地域の社会史的な研究のアプローチが必要と説く。

第二部は八人の報告及びコメントでまとめられている。

一番目は菊池徹夫「土器文化からアイヌ文化へ」は他の報告と形が異なり、シンポでの発表への質問に回答する形を取っている。菊池氏はアイヌ文化の成立に関する「オホーツク文化」の影響の強さを一貫して主張しているが、本報告ではさらにその要因として、鎌倉期以降の蝦夷地の本州への海産物交易の増大に伴い、農耕的な「擦文文化」が衰退して、その代わりに、より狩猟・漁労的な「オホーツク文化」の影響が強まったのではないかと論じている。これに対して、具体的な影響の内容や、変

化の原因などに質問が集中した。この報告を踏まえて、菊池俊彦氏が「アイヌ文化の起源と系統をめぐる」というコメントを寄せ、オホーツク文化のアイヌ文化に対する影響をめぐる論争史を手際よくまとめており、菊池徹夫氏の報告の背景を理解する手助けとなる。

二番目の「勝山館・発掘調査十年の成果と課題」は上ノ国町で一貫して、蛸崎氏の当初の本拠地であった勝山館の発掘に携わってきた松崎水穂氏の報告。交易の拠点として、また蝦夷地と和人との接点としての勝山館の性格を明らかにするのが課題という。

三番目の佐々木浩一「根城・発掘調査の成果」は前発表と対象的に、本州側での中世城郭、根城南部氏の本拠地であった根城について、最近の発掘結果を基にまとめたもの。

この二人の報告のように今回初めて歴史考古学な成果が発表に取り入れられた。もともと、両報告相互にとりたてて関連はなく、特に後者において、本大会のテーマである「海峡を挟む地域像」の中でどう位置づけるか、という視点もほしかった気がする。また、前者については城郭の発掘報告にしては郭内の遺構配置図等が一切添付されておらず、読者の理解を妨げているのが惜しい。ともあれ、当地域については、古代・中世については文献のみで過去を語るのは限界があるのは自明の理であり、第二巻の民俗・言語学的アプローチに続いて、いわゆる「歴史時代」においても今後このような発表が重要視されるであろう。

四番目は長谷川成一「本州北端における近世城下町の成立」。津軽藩を事例に、近世統一領主権力の成立を、領内城郭の破却、在地勢力の取り込み、領内寺社の集中、検地と家臣への知行宛行状の発給、城下町商人・

職人の招聘、の諸点から歴史地理学的に地図上にプロットし、分析する。また、本文では軽く触れられているだけだが、他の戦国大名と異なり、領内統一過程において異民族（アイヌ）との戦いが含まれていたことは注目されている。これを受けて、玉井哲雄氏が「近世城下町成立過程における本州北端について」と題してコメントし、近世領主権力の成立が統一政権という上からの要請もあつたことを強調。また、それを踏まえて、弘前が他の城下町との共通性もさることながら、固有性、特殊性にも検討を加える必要があるとする。

五番目の田中秀和「幕藩権力の解体と北海道」は、蝦夷地（奥州を含む）に対しての、幕末維新期の松前藩、明治新政府それぞれの「認識」のあり方を探っている。蝦夷地唯一の藩として自己の存在をアピールしようとする松前藩に対し、新政府は天皇制イデオロギーを貫徹する場所として「皇化」「王化」の対象として蝦夷地を捉らえた、という。これに対し木村直也氏は「幕末維新期における北方地域の編成をめぐって」というコメントで、松前藩に対しては第一次幕藩化からのスパンで見ると、また新政府に対しては、奥州を「未開」としてみるのは戊辰戦争の敗戦だけが理由か、また和人とアイヌでは認識の質が違うのではないかと、いう注目すべき問題提起をしている。

第三部は新規書き下ろしの論稿で構成されている。第二部と比較して割合個別事象に視点がおかれている。

最初は小口雅史「『夫』字箋（墨）書について」。主に九〜一世紀に発掘された土器のうち「夫」字をもつ物について、「夷」の略字体として認めるかどうかについて。最近多く発掘されたこれらの土器をもとに、

認められないという荒木陽一郎氏の論に反論している。またその史的意義についても、蝦夷の饗応に用いられたのみでなく、在地での使用の可能性があつたことを指摘している。

二番目は故山田秀三「北海道のモイワと秋田・青森のモヤ」。両者が景観的に非常に共通性がある（いずれも周囲から際立つ独立丘）ことからアイヌ語語源として見たとき、「モ・イワ」小さい・神山」でないかと推測する。「イワ」は単なる「山」でなく「カムイ・イワキ」神・住む・処」の省略であるという。実証的論稿である。

三番目は浪川健治「北奥の鉄需要と地域関係」は小論ではあるが、生産財としての鉄の供給体制について、南部藩と津軽藩を比較したもので、廻船の造船・補修の基地として田名部産鉄を統制下においた前者に対し、一七世紀後半においても、領主的な需要すら領外からの移入で賄なわざるを得なかつた後者。それぞれの地域的関係を見ている。

最後に研究余録、エッセイ的小論が三編ある。青山忠正「館城址」は明治維新後短期間松前氏の居城となつた館城について、藩庁を移した目的や、場所選定の理由について探る。維新後の藩政史を藩庁移転という視点で見た研究は少なく好例。渡部孝之「勝山館跡のある町に住んで」は上ノ国町住人としてシンポジウムにあたって、地域史研究の意義について述べたもの。河西英通「近代史からの接点」はこれまでのシンポジウムの結果をふまえて近代史研究の意義を「多民族国家論」という視点から述べている。民族的多数者である「日本人」の相対的対象化も必要と説いている。

### III

以上、概略ながら述べてきた。昨年(一九九三年)は地方史研究協議会も北方史の視点から「異域・異国との接点」を大会テーマに取り上げ、当地方の研究者により多くの発表があった。また、国際先住民年であったことから、北海道・東北の先住民であるアイヌ民族にスポットがあつた結果、北方史は一見ブームの観がある。もつとも、これを単に一過性のものとして捉えるのでなく、さらに再構築を重ねることが必要である。

これは研究者のみならず、読者たる我々についても常に問題意識を問いつけていかなければなるまい。これは歴史の素材を単に研究の対象として見るだけでなく、例えばアイヌ問題一つ取つても現在につながる問題である。その背景である「アイヌ、或いは和人にとつての過去から現在に通じる北方社会」を理解しなければ本質は見えて来るまい。

その意味で一貫して、第一巻、第二巻と北方史、北方交流史を探索してきた北海道・東北史研究会の成果は評価されなければならない。各自の研究テーマと違つても、考古、古代・近現代と学際的に地域を総合的に考えることができ、ひとつの地域像を明らかにしようとする姿勢には自分も教えられる点が多かつた。昨年はまた琉球音楽ブームにみられるように、地域的独自性の主張が南北で見られた年であつたが、そのことは日本の中で自らの相対的位置を確認する事でもある。そして相対的位置を知るといふことは、一方で日本の他の地域、例えば西南地域と比較対象することにより、日本史を広い視野で見る力を養うのではないだろうか。その意味で、できれば研究者以外の読者にも読んでいただきたい本である。なお、アイヌ史・北方史の全体像、時代像を知るうえで、

今回はやや個別事象の研究が中心となつているため、一巻、二巻からの通読をお勧めする。

なお、本文の内容と直接関係ないが、本書の装丁について一言。第一巻、第二巻は共通の装丁であるが、第三巻である本書は装丁を変えた。統一性ということを考えれば共通とした方がよかつた気がするが、今回はタイトルも変わったことであるし、新たな意気込みを現すものとして、次回以降に注目したい。

(三省堂 一九九三年 四六判 三〇七頁 定価二九五〇円)

(なかのわたり・かずやす 青森県立郷土館研究員)

◎弘前大学国史研究会例会は、左記の通り弘前大学人文学部において開催された。

第五一回 長谷川成一氏「北の元和偃武」

平成五年十二月十二日

第五二回 斎藤尚智氏「一向一揆の基本的性格について——加賀一向

一揆と三河一向一揆の比較を通して——」

平成六年二月二十日

◎本年度の本研究会大会は、七月三日を予定しておりますが、大会の詳細は改めてご案内致します。

◎本会の郵便振替口座が、五月一日より次のように変更になります。

新 振替口座 ○二三〇〇—一—六三四

弘前大学国史研究会

ただし、当分の間、同封の振替用紙は使用できますので、会費の振込みにお使い下さい。

(H)

## 日本近世の法と民衆

黒龍十二郎著 近世の司法制度を津軽藩の事例を素材に詳細に考究した著者積年の労作。武士のみならず、農民・町人・僧侶・神官・遊女までも対象とし具体的に論ずる。併せて黒石藩領にも触れる。

A5判・四八〇頁 九五〇〇円

## 古代国家と東国社会

千葉歴史学会編 執筆||岡本東三・森田喜久男・長谷川暁・伊藤循・仁藤敦史・河名勉・宮原武夫・佐々木虔一・武廣亮平・川尻秋生 古代房総関係文献目録(齋藤融編) 千葉史学叢書1

A5判・三九〇頁 八〇〇〇円

## 日本中世の法と権威

田中修實著 中世日本の法体制と権威の実相を備前・備中・美作の事例を中心に克明に追究する。内容||明法勘文/置文/禁制・掟書・国界/荘園/法現象/国郡と祭祀/受領名官途/室町時代の国司、外。 七〇〇〇円

## 日本中世社会成立史の研究

泉谷康夫著 平安後期から鎌倉初期の政治・社会の動向を究明した十二篇を収める。内容||税目別専当制について/寄人と庄園整理/任用国司について/守護・地頭制度の成立に関して、外。 六〇〇〇円

## 城下町富山の町民とくらし

田中喜男著 加賀前田藩の支藩富山藩の城下町である富山の町民のくらしの実態を、町名・行政・商業活動・芝居・興行・町人の負担・売薬・祭礼・町並・街道などから多角的に考察した待望の書。 三〇〇〇円

価格は税別

高科書店

〒112 東京都文京区水道2-9-8 星合ビル202 ☎03(3946)7595 FAX.03(3946)4787